［別紙 2］

審査の結果の要旨

氏名　横関　仁

本研究は脳性麻痺患者を治療する際に、重要となる患者の将来能力の予測を行うために、患者の幼少時期における出生児体重、仮死の有無などの周生期危険因子、痙攣発作の有無、摂食状況などの療育期間の健康状態、Moro反応・非対称性緊張性頸反射（ATNR）の消失時期などの原始反射の推移、首すわり・肘立て完成時期などの各種運動機能の出現時期、麻痺領域・型別分類、３歳時と成人時のＩＱレベル（Wechsler intelligence scale）、てんかんの有無、股関節脱臼・側弯症等の変形の有無や側弯症の発生時期、整形外科手術の有無等５０項目を調査し、数量化Ⅱ類を使用して移動、独歩や摂食、更衣、排泄能力などの日常生活動作の自立、経済的自立能力を予測したものであり、以下の結果を得ている。

１．移動能力の獲得の予測は、肘立て、寝返り、首すわりの完成時期の評価と側弯発生時期、幼児期の健康状態を評価することによって、94.2％の確率で予測可能であった。

２．独歩の獲得の予測は、四つ這い、首すわり完成時期の評価と麻痺領域、幼児期のIQの評価を行うことによって、84.2％の確率で予測可能であった。

３．摂食の自立の予測は、発語時期、肘立て完成時期、首すわり完成時期、四つ這い完成時期、寝返り完成時期の評価を行うことによって、90％の確率で予測可能であった。

４．更衣の自立に関する予測は、麻痺領域、IQ（幼児期）、首すわり完成時期、四つ這い完成時期、肘立て完成時期の評価を行うことによって、89.6％の確率で予測可能であった。

５．排泄の自立に関する予測は、麻痺領域、IQ（幼児期）、四つ這い完成時期、首すわり完成時期、肘立て完成時期の評価を行うことによって、90％の確率で予測可能であっ

た。

６．経済的自立能力の獲得の予測は、歩行開始時期、幼児期のIQ、麻痺領域、肘立て完成時期、首すわり完成時期を評価する事によって、81.8％の確率で予測が可能であった。

以上、本論文は脳性麻痺児の幼少時期における各種項目を評価し、それらの複数因子から多変量解析を用いて、成人期での移動、独歩、日常生活動作の自立の可否、経済的自立の可否の予測がどの程度まで可能となるかを明らかにした。本研究はこれまで単一因子でしか行われなかった脳性麻痺児の成人期の能力の予後予測を複数因子で行ったことと、追跡調査した症例が15年以上、最終診察年齢が18歳以上と長期にわたっていることから、予後予測の可能性を高くしていると考えられる。脳性麻痺児の治療において成人期の予後予測を行うことは療育効果をあげる意味において重要であり、本研究はその予後予測に重要な貢献をなすものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。